

医療福祉系大学生の学業に対する リアリティショックとその対処の現状

Current situation of university students majoring in healthcare and welfare regarding reality shock and coping behavior in schoolwork

森本 陽子¹⁾、金子 祐大¹⁾、齋藤すが代¹⁾、戸川 桂一¹⁾、森重 恵介¹⁾、井上寿美香¹⁾
片山久美子¹⁾、陳 暁倩¹⁾、中村幸一郎¹⁾、草平 武志²⁾、人見 英里²⁾、吉村 耕一²⁾

Yoko MORIMOTO¹⁾, Yudai KANEKO¹⁾, Sugayo SAITO¹⁾, Keiichi TOGAWA¹⁾, Keisuke MORISHIGE¹⁾,
Sumika INOUE¹⁾, Kumiko KATAYAMA¹⁾, Chen XIAOQIAN¹⁾, Koichiro NAKAMURA¹⁾,
Takeshi KUSAHIRA²⁾, Eri HITOMI²⁾, Koichi YOSHIMURA²⁾

要旨

本研究では、医療福祉系大学生の学業に対するリアリティショックの現状を明らかにするために、看護学科、栄養学科、社会福祉学科の学生126名を対象として選択式質問紙調査を実施した。学業に関連する15項目の中で、過半数の学生がリアリティショックを感じた項目は、講義に関して「ゆとりが無い」「楽しくない」「理解できない」、実習・演習に関して「ゆとりが無い」「難しい」と「能力が劣ると感じる」であった。これら6項目全てにおいて、リアリティショックを克服できていない学生の方が、克服できた学生よりも多かった。また、何の対処もしなかった学生の方が、誰かに相談する等の何らかの対処を行った学生よりも多かった。

キーワード：リアリティショック、学業、医療福祉系、大学生

Abstract

This study investigated the current situation of university students majoring healthcare and welfare with respect to the reality shock they perceive in schoolwork. A multiple-choice questionnaire was conducted among 126 students majoring nursing, nutrition, and social welfare. Among 15 question items, 6 were considered to correlate to reality shock with the majority of the students: lectures being “overwhelming,” “unstimulating,” or “incomprehensible,” along with practices/exercises being “overwhelming,” “hard to deal with,” and “demanding for much higher skills.” Of those, the students who had been unsuccessful to overcome their reality shock outnumbered the ones who could. Also, the students who did not take on any coping behaviors outnumbered the ones who did, for example by consulting someone.

Keywords : reality shock, schoolwork, healthcare and welfare, university student

1) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士前期課程

2) 山口県立大学大学院健康福祉学究科

1) Masters Program, Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

2) Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

I 背景

大学生の約70%が、入学前に描いていたイメージと現実の学生生活との間にギャップを感じていることが知られている（ベネッセ教育総合研究所2007）。このような期待と現実のギャップはリアリティショックと呼ばれており、大学生活に対するリアリティショックについては「時間的ゆとり」「友人関係」「行事」「学業」の4つの領域が注目されている（千島ら2015）。この中で特に学業は、職業イメージを持って入学する医療福祉系大学の学生にとって将来の職業に直結する重要な要素である。学業に対するリアリティショックに関する研究報告は、近年少なからず認められるが（半澤2007、松島ら2012、半澤2013、岩井2017）、医療福祉系大学生を対象とした研究報告はほとんど知られていない。もし医療福祉系の学生がその専門的な学びにおいてリアリティショックを感じるようなことがあれば、大学生活への適応のみならず将来の職業適応にも大きな影響を及ぼしかねない。そのため、医療福祉系の学生を対象として学業に対するリアリティショックの現状を調査し、必要に応じて対策を検討することは喫緊の課題である。

II 研究目的

本研究では、医療福祉系大学生の学業に対するリアリティショックとその対処の現状を明らかにすることを目的とした。

III 用語の定義

本研究におけるリアリティショックとは、学業に対するリアリティショックを意味し、半澤の定義に従って「入学前に抱いていた大学における学業のイメージや期待と、大学入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じた否定的な違和感」とする（半澤2007）。

IV 研究方法

1. 調査対象者と調査内容

山口県立大学の看護学科、栄養学科、社会福祉学科の3年生を調査対象として、2017年7月に質問紙調査を実施した。

学業に対するリアリティショックに関連する以下の項目(1)～(4)についての質問を設定し、選択肢で回答を求めた。

- (1) 基本属性：性別、所属学科等（7問）
- (2) 講義に関するリアリティショックの有無、克服

の有無、対処方法（7問）

(3) 実習・演習に関するリアリティショックの有無、克服の有無、対処方法（6問）

(4) 能力や職業イメージに関するリアリティショックの有無、克服の有無、対処方法（2問）

リアリティショックの有無は「ある」「ない」の2択とした。「ある」の場合には、その克服および対処の有無をそれぞれ「ある」「ない」の2択から選んでもらった。さらに、対処の経験が「ある」の場合には、その対処行動を①1人で気分転換活動、②他者と気分転換活動、③学内の友人に相談、④学外の友人に相談、⑤先輩に相談、⑥家族に相談、⑦教員、実習指導者に相談、⑧とにかく目の前のこと（課題など）に取り組む、⑨その他の9つの選択肢から主なもの3つ以内で選択してもらった。

2. 分析方法

各質問について単純集計を行った。さらに、対処の有無と克服の有無との間の関連性を明らかにするためにクロス集計を行い、有意差の判定はFishser正確確率検定により行った。有意水準は5%とした。解析ソフトはSPSSバージョン24を用いた。

3. 倫理的配慮

本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号29-15）。調査対象者には、研究目的、調査協力は任意であること、回答を拒否した場合でも不利益等は受けないこと、得られたデータは本研究以外に使用しないこと等について、紙面（質問紙）及び口頭で説明した。質問紙の配布は、学科長等の了承を得た上で行った。質問紙は無記名とし、回収ボックスにより回収し、質問紙への回答・投函をもって本研究に同意を得たものとした。

V 結果

1. 調査対象者の基本属性

調査票配布数210枚、回収数127枚（回収率60.5%）、有効回答126枚（有効回答率60.0%）であった。男性12名（9.5%）、女子114名（90.5%）であった。所属学科は、看護学科40名（31.7%）、栄養学科19名（15.1%）、社会福祉学科67名（53.2%）であった。家族と同居している学生は27名（21.4%）と少なく、県外出身者が約半数（49.2%）であった。希望の学科として入学してきた学生が107名（84.9%）と大半であり、入学前に就きたい職業が決まっていた学生と現在

就きたい職業が決まっている学生はいずれも過半数(61.9%)を超えていた(表1)。

2. 講義に関するリアリテシヨックとその克服

講義に関する7つの質問の中で、リアリテシヨックを感じたことがあると回答した学生が多かったのは、問4「興味がわく講義がない、思っていたほど講義が楽しくない」(65%)、問6「考えていた以上に講義

が難しい、理解ができない」(61%)と問7「講義やその課題が多く、時間的なゆとりがない」(71%)であった。次いで、問1「基礎・教養科目(外国語や体育など)を学ぶ上で、自分の専門とは関係がない」(49%)と問3「講義の内容が役に立つのかわからない」(46%)について、約半数の学生がリアリテシヨックを感じたことがあると回答した。一方で、問2「概論や理論の講義が多く、自分が想像していた学習がなかなかできない」(30%)と問5「講義を受ける中で将来をイメージできない」(29%)は、講義に関する質問の中ではリアリテシヨックを感じたことがあると回答した学生が比較的少なかった(図1)。

リアリテシヨックを感じたことがあると回答した学生に対し、そのリアリテシヨックを現在までに克服できているかを尋ねた結果、問1以外の6つの質問で、克服できていない学生が克服できた学生よりも多かった。特に、問4「講義が楽しくない」、問6「講義が難しく理解できない」と問7「時間的なゆとりがない」については、克服できていない学生がリアリテシヨックを感じたことがある学生の大半を占め、調査対象学生全体の中でも1/3以上に上った。また、問2「概論や理論の講義が多すぎる」と問5「将来をイメージできない」については、リアリテシヨックを感じたことがある学生の割合自体は比較的少なかったが、その中では克服できていない学生が大部分を占めていた(図1)。

表1. 調査対象者の属性(n=126)

	n	(%)
性別	男	12 (9.5)
	女	114 (90.5)
所属	看護学科	40 (31.7)
	栄養学科	19 (15.1)
	社会福祉学科	67 (53.2)
家族と同居	はい	27 (21.4)
	いいえ	99 (78.6)
入学前の住まい	県内	64 (50.8)
	県外	62 (49.2)
希望の学科に入学した	はい	107 (84.9)
	いいえ	19 (15.1)
入学前に就きたい職業は決まっていた	はい	78 (61.9)
	いいえ	47 (37.3)
	無回答	1 (0.8)
現在就きたい職業は決まっている	はい	78 (61.9)
	いいえ	48 (38.1)

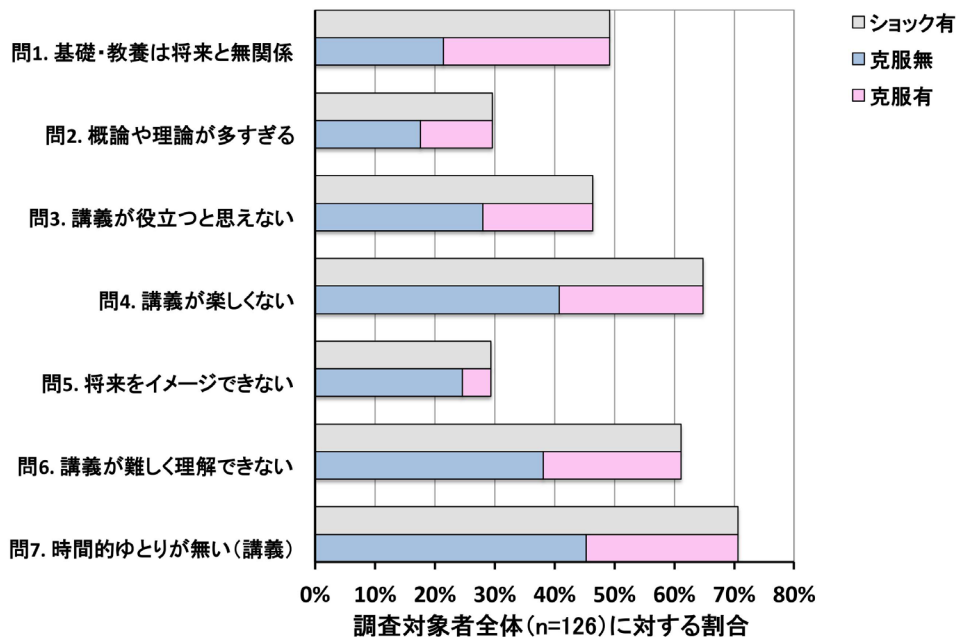


図1. 講義に対するリアリテシヨックとその克服

3. 実習・演習に関するリアリティショックとその克服

実習・演習に関する6つの質問の中で、リアリティショックを感じたことがあると回答した学生が多かったのは、問8「実習や演習の内容が考えていた以上に難しく、自分にはできない」(58%)と問9「実習や演習でその課題、準備が多く、時間的なゆとりがない」(68%)であった。一方で、問10「実習で自分がやりたいことができない・考えていたような経験ができない」(29%)、問11「実習で関わる相手(患者や利用者など)との関係がづらい」(31%)、問12「実習のグループ内の人間関係がづらい」(26%)、問13「実習指導者や教員との関係がづらい」(29%)については、リアリティショックを感じたことがあると回答した学生が比較的少なかった(図2)。

リアリティショックを感じたことがあると回答した学生に対し、そのリアリティショックを現在までに克服できているかを尋ねた結果、6つ全ての質問で、克服できていない学生が克服できた学生よりも多かった。特

に、問8「実習や演習が難しい」と問9「時間的なゆとりがない」については、克服できていない学生がリアリティショックを感じたことがある学生の約2/3を占め、調査対象学生全体の中でも1/3以上に上った(図2)。

4. 能力・職業イメージに関するリアリティショックとその克服

能力と職業イメージに関する質問の中で、リアリティショックを感じたことがあると回答した学生が多かったのは、問14「将来就きたい職業に関して、自分の能力が他者より劣る」(66%)であった。問15「今の学部やイメージしている職業以外への進路変更を考えたことがある」(44%)については、リアリティショックを感じたことがあると回答した学生が少なからずいた(図3)。

リアリティショックを感じたことがあると回答した学生に対し、そのリアリティショックを現在までに克服できているかを尋ねた結果、両方の質問で、克服で

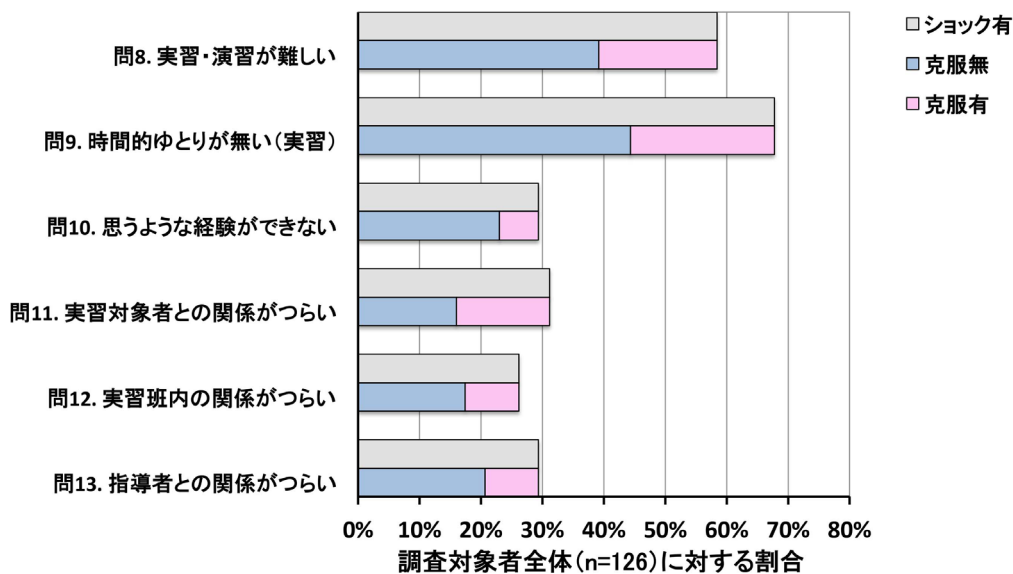


図2. 実習・演習に対するリアリティショックとその克服

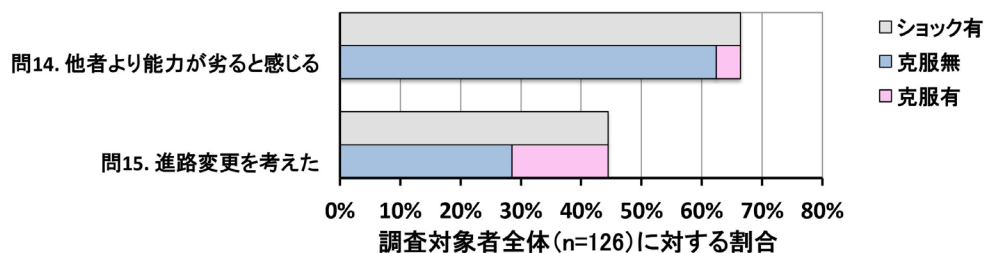


図3. 能力・職業イメージに対するリアリティショックとその克服

きていない学生が克服できた学生よりも多かった。特に、問14「自分の能力が他者より劣る」については、克服できていない学生がリアリティショックを感じたことがある学生の大多数を占め、調査対象学生全体の中でも過半数に上った（図3）。

5. リアリティショックに対する対処

リアリティショックを感じたことがあると回答した学生に対し、そのリアリティショックに何らかの対処

をしたか否かを尋ねた。その結果、過半数でリアリティショックがみられた6つの質問（問4、問6、問7、問8、問9、問14）の全てにおいて、何らかの対処をした学生はリアリティショックを感じた学生の1/5～1/3程度しかおらず、何も対処しなかった学生よりも明らかに少なかった。特に、問4「講義が楽しくない」（17%）と問14「自分の能力が他者より劣る」（21%）については、何らかの対処をした学生が著しく少なかった（図4）。

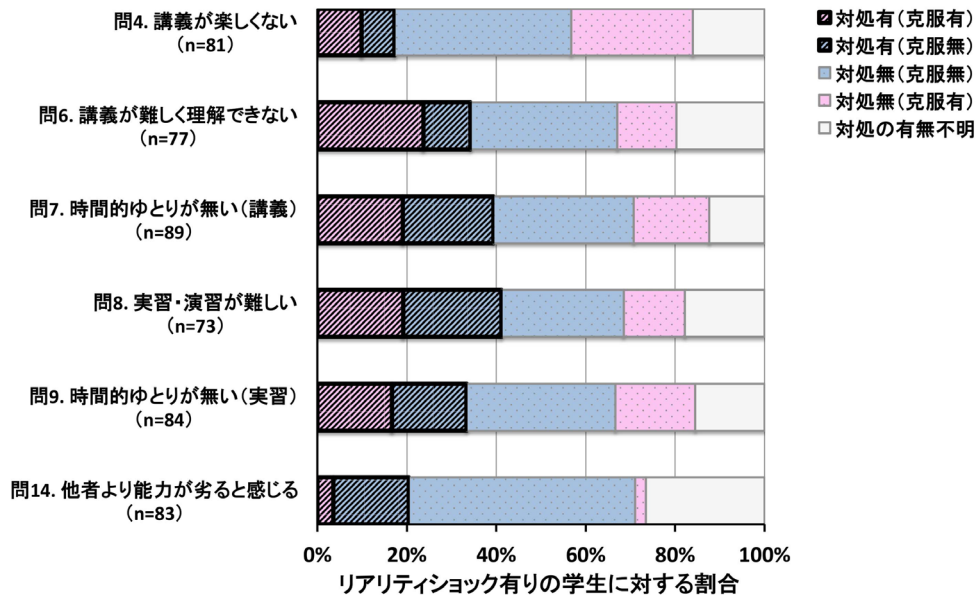


図4. リアリティショックに対する対処

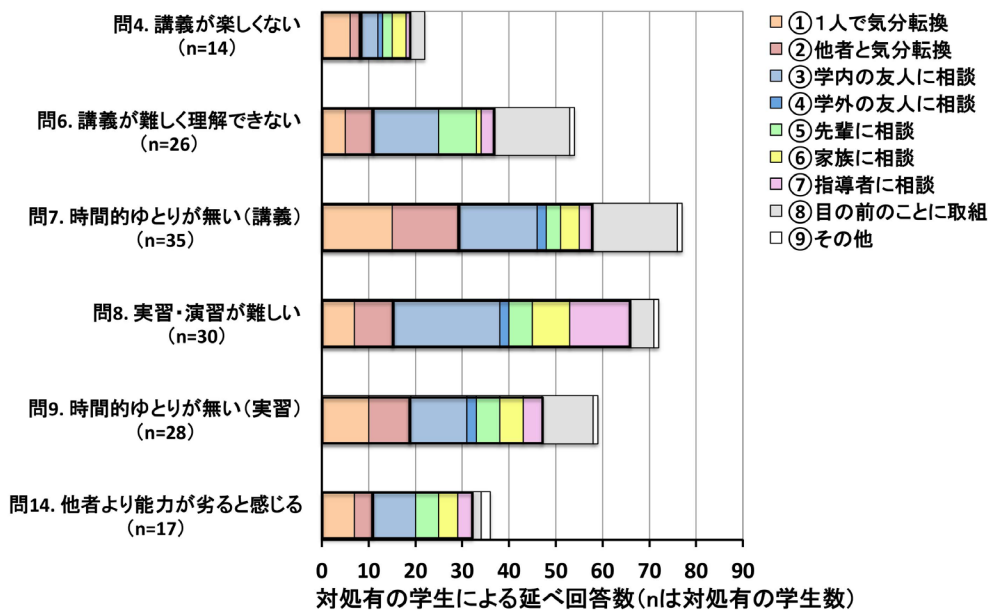


図5. リアリティショックに対する対処の方法

また、何らかの対処をした学生に対し、その対処の方法を複数回答可で尋ねた結果、最も多く用いられていたのは誰かに相談することであった。相談相手としては学内の友人が最も多く、次いで指導者（実習指導者や教員）または家族であった。問6「講義が難しく理解できない」については、学内の友人に次いで先輩への相談が比較的多かった。その他の対処方法は、一人または他者と気分転換をすることと、とにかく課題などの目の前のことに取り組むことであった（図5）。

さらに、リアリティショックに何らかの対処をした学生とリアリティショックを感じたことがあるが何も対処しなかった学生を、そのリアリティショックを克服できたか否かで比較した。その結果、問6「講義が難しく理解できない」についてのみ、何らかの対処をした学生ほど克服できていることが明らかになった（ $p<0.01$ ）。しかし、過半数でリアリティショックがみられた問6以外の質問（問4、問7、問8、問9、問14）では、何らかの対処をしたことが克服できたことに関連する結果は認められなかった（表2）。

VI 考察

1. リアリティショックの現状

本研究で調査した学業に関連する15項目の中で、

50%以上の学生がリアリティショックを感じた6項目は、講義に関して「楽しくない（問4）」「理解できない（問6）」「ゆとりが無い（問7）」、実習・演習に関して「難しい（問8）」「ゆとりが無い（問9）」と「能力が劣ると感じる（問14）」であった。この中でも問7と問9は共に時間的ゆとりに関する項目であり、リアリティショックを感じた学生の比率が15項目の中で最も多かった（問7；71%、問9；68%）。すなわち、今回の調査対象学生の多くは、入学前に想像していた以上に講義と実習の課題や準備に追われ、時間的なゆとりがないことにリアリティショックを受けていることが明らかになった。先行調査から、生活科学・保健衛生・医・歯・薬・理・工学系の大学生が感じるギャップの背景として「実験や実習が多く忙しい」ことが示唆されている（ベネッセ教育総合研究所2007）。また、大学生生活に対する期待と期待外れについて調査した先行研究によると、自由な生活、人間関係、学業、課外活動、享楽と自己成長の6カテゴリの中で、自由な生活が、最も期待していたことであると同時に最も期待外れなことであり、自由でゆとりがある大学生生活を送ることを大学入学前には期待するが、実際には期待通りの生活を送れていないという大学生が多いことが示されている（千島ら

表2. リアリティショックに対する対処と克服の有無の関連

			克服できた	克服できていない	p値(フィッシャーの正確検定)
問4. 講義が楽しくない	何らかの対処をした	n (%)	8 (57.1)	6 (42.9)	0.367
	対処しなかった	n (%)	22 (40.7)	32 (59.3)	
問6. 講義が難しく理解できない	何らかの対処をした	n (%)	18 (69.2)	8 (30.8)	0.002
	対処しなかった	n (%)	10 (28.6)	25 (71.4)	
問7. 時間的ゆとりが無い(講義)	何らかの対処をした	n (%)	17 (48.6)	18 (51.4)	0.253
	対処しなかった	n (%)	15 (34.9)	28 (65.1)	
問8. 実習・演習が難しい	何らかの対処をした	n (%)	14 (46.7)	16 (53.3)	0.430
	対処しなかった	n (%)	10 (33.3)	20 (66.7)	
問9. 時間的ゆとりが無い(実習)	何らかの対処をした	n (%)	14 (50.0)	14 (50.0)	0.227
	対処しなかった	n (%)	15 (34.9)	28 (65.1)	
問14. 他者より能力が劣ると感じる	何らかの対処をした	n (%)	3 (17.6)	14 (82.4)	0.127
	対処しなかった	n (%)	2 (4.5)	42 (95.5)	

2015)。このように、時間的なゆとりがないことに対するリアリティショックは医療福祉系大学生の抱える大きな問題点と言える。今後、その対策を検討していく必要があると考えられる。

一方で、リアリティショックを感じた学生が少なかった主な項目は、講義に関して「将来をイメージできない(問5)」と、実習・演習に関して「関わる相手との関係がづらい(問11)」「グループ内の人間関係がづらい(問12)」と「指導者や教員との関係がづらい(問13)」であった。問11、問12と問13は、いずれも人間関係に関する項目である。大学生全般では、大学生活の中間期の3年生は、対人関係がより深まる時期であり、卒業が視野に入る時期でもあるため、対人関係において心理的に不安定な時期であるという見方もある(高坂2012)。しかし、今回の調査では、人間関係に関するリアリティショックがあると回答した学生は少なく、様々な人間関係に対して想像していたものとの間に大きなギャップを感じることなく適応できている学生が多かったと考えられた。このように人間関係に関するリアリティショックが少ないことは、問5の将来イメージに関するリアリティショックが少ないこととあわせて、ある程度職業イメージを持って入学する医療福祉系大学生の特徴であると考えられる。

2. リアリティショックの克服状況

本調査の15項目中間1を除く14項目で、経験したリアリティショックを克服していない学生の方が、リアリティショックを克服できたと回答した学生よりも多かった。

特に、過半数の学生がリアリティショックを感じた6項目(問4、問6、問7、問8、問9、問14)では、リアリティショックを感じた学生の約2/3以上がリアリティショックを克服していなかった。リアリティショックの克服率がこのように低かった理由として、今回の調査対象者が3年次前期の学生であったことが考えられる。医療福祉系大学のこの時期には、より専門的な分野の講義が増えると共に実習が本格化するため、調査対象学生がちょうど講義や実習・演習に困難さを感じはじめたばかりで、まだ克服には至っていなかった可能性がある。特に克服率が6%と顕著に低かったのが、「能力が劣ると感じる(問14)」であった。これも、本格化していく実習の中で他者の実践を目のあたりにするために、自分の実践が出来ていないことをより際立って実感してしまう機会がこの時期に増えるためと推察される。実習・演習は、実践と振り

返りを繰り返す過程で、成功体験を積み、様々なことを修得するものであるため、自然に克服できる場合でもある程度の時間を要することは十分考えられる。しかしながら、そのような自然な経過による克服を安易に期待できるかどうかについては、本研究でも明らかにできていない。今後のさらなる検討が必要と考えられる。

3. リアリティショックの対処状況

過半数の学生がリアリティショックを感じた6項目(問4、問6、問7、問8、問9、問14)において、リアリティショックを感じた学生の中の過半数は、何の対処も行っていない。このように、リアリティショックに対する対処の実施率が低かった理由の一つとして、リアリティショックの克服率と同様に、3年次前期という調査時期が影響した可能性がある。リアリティショックを感じてから対処し克服するまでにはタイムラグがあるので、後の時期で調査すれば、対処率や克服率が今回の調査結果よりも増加することは十分考えられる。しかし、時間経過とともに自然にリアリティショックを克服できるのではないかと学生自身が楽観的に捉えたと、何の対処もせず、リアリティショックの問題が先送りされるだけになる可能性がある。と、学業に対するリアリティショックの先行研究において警鐘が鳴らされている(半澤2013)。したがって、医療福祉系大学生のリアリティショックの問題を解決するためには、リアリティショックを感じてから対処し克服するまでの経過をさらに詳細に明らかにすることが今後必要であると考えられる。

今回の調査では、リアリティショックへの対処の方法として、気分転換や誰かに相談すること等から複数回答可で尋ねた結果、多かった回答は学内の友人や先輩、指導者等の誰かに相談することであった。そのような対処方法を実施したことが、「講義が理解できない(問6)」のリアリティショック克服には結びついていることが本調査で確認された。しかしながら、過半数の学生がリアリティショックを感じた6項目(問4、問6、問7、問8、問9、問14)中の他の5項目については、対処の実施とリアリティショックの克服との間に関連性が見出せなかった。リアリティショック克服のための有効な対処方法を明らかにしていくことも今後の研究に求められる重要な課題であると考えられる。

Ⅶ 結論

医療福祉系大学3年生126名を対象として、学業に関連する15項目の質問紙調査を実施した結果、講義に関して「ゆとりが無い」「楽しくない」「理解できない」、実習・演習に関して「ゆとりが無い」「難しい」と「能力が劣ると感じる」の6項目について、過半数の学生がリアリティショックを感じていた。さらに、これら6項目において、リアリティショックを克服できていない学生の方が、克服できた学生よりも多かった。また、何の対処もしなかった学生の方が、誰かに相談する等の何らかの対処を行った学生よりも多かった。すなわち本調査の結果から、多くの医療福祉系大学生が将来の職業に直結する学業に対するリアリティショックを経験していることと、その対処や克服が不十分であることが示された。一方で、リアリティショックの問題を解決するためには不明な点も多く、今後もさらなる研究が望まれる。

謝辞

本研究にご協力いただきました山口県立大学社会福祉学部社会福祉学科、看護栄養学部看護学科並びに栄養学科の3年生の皆様、さらに各学部学科の教員の方々に厚くお礼申し上げます。

なお、本研究の立案、調査、実施、データ解析、ならびに論文執筆について、森本、金子、齋藤、戸川、森重は同等に貢献した。

文献

- ベネッセ教育総合研究所：学生満足度と大学教育の問題点2007—第4章学生満足度調査の概況.
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/manzokudo/2007/pdf/data_06.pdf (2018年2月23日アクセス)
- 千島雄太, 水野雅之：入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響—文系学部の新入生を対象として—. 教育心理学研究 63 (3), 228-241, 2015.
- 半澤礼之：大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成. キャリア教育研究 25 (1), 15-24, 2007.
- 松島るみ, 尾崎仁美：大学授業観が学習意欲・大学満足感に及ぼす影響：学業に対するリアリティショックを媒介として. 京都ノートルダム女子大学研究紀要 (42), 105-118, 2012.
- 半澤礼之：大学生の将来展望と学業に対するリアリ

ティショック：縦断的面接調査による質的検討. 釧路論集：北海道教育大学釧路分校研究報告 45, 17-24, 2013.

岩井貴美：大学1年生の学業に対するリアリティショック状態における職業意識と学ぶ意欲の関連性. 近畿大学商学論究16 (1), 23-33, 2017.

高坂菜里：大学生の対人関係と学校ストレス：1年生と3年生を対象とした調査研究. 暁星論叢 (62), 55-84, 2012.